

人と人をつなぐもの

世羅町立甲山中学校
第3学年 多留見 明里

人と人をつなぐもの

甲山中学校 三年 多留貝 明里

果てしなくある言葉の中から、もつともふたわしいもの、正確に選ぶ、自分の思いを誰かに伝えようとするのは、こんなにも素敵なことだ。私はいっ舟を編む、という本を読んで、そう思った。

この物語の舞台は、玄武書房辞書編集部。

もうすぐ定年を迎えるベテラン編集者・荒木

は、自分の後継者となる新しい辞書編集部員

を探していた。そこで出会ったのが、営業部

内で変人扱いされていた馬締光也だ。た。律

儀で、大学では言語学を専攻していたため、

言葉に対して鋭い感覚を持つ馬締と、荒木は

気に入って、辞書編集部に迎えたのだ。編

集部では、新しい辞書「大渡海」を作るため

用例採集、見出し語選定、語釈執筆、ミミと毎

日地道な作業に取り組んでいた。馬締は、自

由な発想がある西岡の明るさや、寡黙だが周

回への気遣いも忘れられない佐々木の優しさを

して、辞書づくりには命を懸ける荒木や松本の
情紙（シヅメ）に触れていくうちに、人と関わることに
対しての思いが大きく変化していった。

馬締は、学生の頃から、いくらか知識として
言葉を集めてみることも、うまうま相手に伝えられ
なかつたため、しかたがないと、思いが伝わ
らないうちという事実を、諦めとともに受け入れ
ていた。そんな馬締だが、編集部に入り、職
場の人ともっと仲良くなりたいたい、つながら
ない、その思いを伝えて、いい辞書を作りたい

と、たいと思ひようになつた。

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ。ひとは辞書
という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小
さな光を集める。しつとも、かわしい言葉で、
正確に、思いをだれかに伝えるために、新し
い辞書の名をうた渡海にしたりした理由を、荒木
が説明したときの言葉だ。私も馬締も、みん
な自分の感情の数だけ、言葉を知って、いる訳
ではない。嬉しい、楽しい、悲しい、憎い、
うらやましい、そんな単純な言葉では、言

い表やない感情を、誰しも数えきれないほど
持つている。自分の思いをうまく伝えられず、
言葉の海におぼれ苦しむ私たちを助けるのが、
辞書という名の舟なのだ。

誰かを勇気づけたいとき、励ましたいとき、
応援したいとき、元気を手えたいとき、悲し
みを分かち合いたいとき、みんなときも、
人と人がつながるためには、言葉が必要だ。
ときによ言葉は、心をつながつツールといふ枠を
超え、人を変え、動かす力にもなる。だから

こそ私たちは、もっと言葉を大切に、正確に、
そして素直に伝えていかなければならないと
強く感じた。

また、私はこの本を読んで、仕事に対する
考えも大きく変わった。仕事は、どんなに嫌
で面倒であつても、一人で責任を持つて行
くものだと考えていた。しかし、この本を讀
んで、どんな仕事も、決して一人ではなく、
みんなの力が合わつてでかいて、責任と
情熱を持つて行うことが大切なんだと考える

ようになった。辞書をつくるのは、本当に地道な作業の連続で大変だったと思うが、それでもねばり強く取り組めたのは、大波海づくりには携わる人がみんなよりよい辞書を作りたいたい、そう思って自分の仕事に情熱を持って行っていただけではないだろうか。喜ばも苦しみも味わいながら、みんなで一生懸命、作って来たものだからこそ、完成したところの達成感や感動もより一層、強くなると思う。私も将来、情熱を持って行え、やりがいのある、そんな仕事に就きたいと思った。私はこの本を読んで、不安だらけだった将来に、少し前向きな気持ちを持てた。人とつながり、関わり合うことで、人生はより豊かであり、楽しいものになる。言葉や情熱という強い思いは、そのためのものだといふこと、今日も心れが、懸命に生きていきたいと思う。

〈指導者の言葉〉

本校では、「書く活動」を積極的に取り入れています。特に意見や考えをまとめる際に根拠を明確にして書かせる指導を継続して行っています。文学的文章を学習する際には、「書く活動」をもとに意見交流を行い、読みを深めさせています。

本作品は、国語科の学習の取組課題として、夏季休業中に作成したものです。話の要点をつかんでまとめ、そこから自分が考えたこと感じたことを前向きに、力強い言葉で表現しています。また、自分の思いや考えにふさわしい言葉を選び抜いて書かれているところがすばらしく、言葉が人を動かす力になることを生徒自身が実感として持っているからこそ書けた文章です。そして、ただ漠然とした仕事に対する考え方も、大きく見方が変わり、読後の自分の中での気持ちの変化をしっかりとまとめ、今後の自分の生き方につなげた結びとなっています。